
snow Knight

大久保 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s n o w K n i g h t

【Nコード】

N 3 9 4 7 T

【作者名】

大久保 唯

【あらすじ】

何のために生きているのかすらわからず、孤独に逃げてきた少女。そんな彼女が一人の若い絵描きと出会い、新しい生活の中で見つめる、生きる意味とはなんなのか？ B U M P O F C H I C K E N の楽曲「K」をベースに置いた物語。

フードに頭を隠しつつ、灰色の通りを通っていると、やけに周囲の視線を感じる。いつものことだと言えばそうなのかもしれないけれど、いつも以上にその視線は重く、鋭い。流動的に歩いてくる人並みを掻き分けて、人に埋め尽くされた大通りを歩くのは、正直気兼ねしなかった。生まれつきの鋭い瞳や、頬に切り刻まれた痛々しい切り傷に興味を覚える人も確かにいるだろうけど、見られている当事者のあたしとしては至極迷惑だった。ここが人目に付かないようなら、今すぐこんな連中は潰しているところなのに。

深山のような、冷え切った日だった。体中を黒装束で覆い尽くしていたあたしの姿は、寒さに身を震わせて、ビルに飛び込んでいく通行人の中でも一際目立っていた。季節感を感じさせない、薄い「仕事服」に、太ももを露出したショートパンツに、黒のニーソックス。コートのような厚手の衣類なんて、背中に掛かってない。寒さは確かに深々と感じられたけれど、今はこの場所から今すぐにでも抜けきたい気持ちでいっぱいだった。視線の他にも、本当の意味で「見られていないか」、不安だったからだ。

痛みの走る右足を、動作の効かなくなった猫の尾のように引きずる。スニーカーのつま先は、石の道に擦れてボロボロだった。もうどれだけ歩いてきたのか見当も付かないが、痛みのない左足にも、疲れの音が限界に近い限り、相当歩いてきたのだと思う。実際問題、今捕まれば、何もかも終わりだ。カーデガンに隠れた右腕の切り傷も、銃創も、ひた隠しに出来る事実ではない。

「なあ、あれ」

あたしの耳に、無機質な声が聞こえてくる。あたしは耳を覆うもみあげを耳穴にふさいで、彼らの声を拒絶する。聴けば——自分が制御できなくなることくらい、わかっていたから。

引きずり気味の足を叩いて、走り出した。黒く、鈍くよんだ空

が、あたしを監視しているようだった。もう何日、陽の光を浴びていないのかもわからない。喉の奥がきりきりと痛む。肉付きの薄い、肩から腕に伝って、熱いものが断末魔の声を上げる。古傷だ。

「お、おい、なんでこんなところに」

ヒビだらけのガラスとしか表現できない廃ビルの前で、あたしの姿を見るなりおののく男の集団を一瞥した。死の恐怖を表したような表情だ。見ているだけで吐き気がした。

けれどその瞬間、青ざめた表情をした集団の一角が立ち上がり、あたしをにらみつけた。五人はいるだろうか。今のあたしがあの集団に襲われたら、たぶん生きて帰れないだろう。

「おまえみたいな野郎はッ」その中の短い金髪の男が、太い声を上げる。「この町から、消えちまえッ」

あたしの細い腕に、鈍い痛みが貫く。骨にはじかれたそれは、道に悲しい音を立てて、町中に響かせたような気がした。空から取り出したような鈍い色をした石は、かすかに血の色を帯びていた。

「そ、そうだ！」

続く声は、ひどく震えていた。

「おまえなんて、この町から消えちまえ！」

「そうだ！」「出てけ！」「この人殺しめ！」

あたしの下に投げつけられる石の量は次第に増え、気づけばそれはあたしのこけた頬や、枝を連想させる腕や、自由の利かない右足に砲火してくる。あたしはそれに抗うことすらできず、ただ足を引きずりながら、足を進める。通り過ぎる人波はあたしに目をくれることもなく、まるでこれが起こっていない事実であるかのように、目を背けていた。

「気味が悪いんだよ！」

「死んじまえ、悪魔め！」

石の雨を側面から受けたあたしは、腰の引けた浮浪者のようにして、彼らから逃げていく。背中に降りかかる罵倒語が鋭い。

胸をえぐられるような罵倒語から逃れて、街道の片隅にぽつんと

居座る廃ビルの影に身を寄せた。気道が狭まったせいか、呼吸するにも酷く苦しい。のどの奥に、液体の重金属を流しているみたいだった。あたしは裂かれて露わになった両二の腕に爪を立てた。爪先に、微かに肉をえぐる感触が伝わる。尖った痛みが、その傷を発端に、体中に拡散する。

地べたに弱々しく腰を下ろすと、闇を迎え始めた空を仰いだ。月はない。あたしを照らすのは、羽虫が集っている、壊れかけの街灯だけだ。他に何も、あたしを照らすものは無い。

孤独は嫌いではなかった。昔から団体行動を苦手としていたから、もしかしたら、孤独を望んでいたのかもしれない。それが災いしたのか、友達と言える人間が側にいることは無かった。だって、誰かと連めば、その人のことを考えて、いたわったり、思いやりたりしなくちゃならない。単に言うのなら、それがわずらわしい。

夜は急速にあたしを包み込んだ。霧のような冷気が、死の予感を近づける。ああ、こんな薄着でいたら、間違いなく死ぬな。そう実感させられるような寒気だ。冷え込みは靴底の薄い靴に潜り込んできて、痛覚を失いかけている傷口にまで、容赦なく広がっていく。荒い呼吸のおかげではつきりとしていた意識も、もうろうとしてきた。これが、死ぬ間際ってやつかな。案外ふわつとしてて、悪くないかもしれない。

あたしは自分の膝にもたれかかった。肉付きのない膝が、体温を失いかけている頬に食い込む。冷蔵した野菜のような冷たさが、頬に伝わる。このまま雪でも降れば、たぶんあたしの命なんて、誰も気にしないうちに簡単に消える。誰にもすがらずに。それは、あたしの求めている孤独の死に方だ。なら、後悔はないかもしれない。

眠気が体中を包み込む。今寝たら、たぶん二度と目を覚ますことはないだろう。でも、今のあたしには、それに抗う力など残っていない。首が自然と、倒れてしまう――

「ねえ、死ぬよ?」

聞きなれない声に、それこそあたしは猫のような飛び上がり方を
して、背のほうを向いた。いつから彼がその場にいたのかは知らな
いけれど、彼はずっと君の後ろにいたぞ、と言わんばかりの表情を
あたしに向けていた。雪を遮るための傘の骨格がさびていて、風貌
は酷く見窄らしい。あたしが言えたことではないけれど、脱色気味
の薄いコートや、穴だらけのジーンズを見るだけで、思わず目をそ
らしたくなる。

「君、どうしたの？ こんな遅い時間帯に」

あたしは彼から目をそらして、耳をふさいだ。優しい声や優しい
表情を取り繕っても、他人の本性なんて物はわかりきっていた。体
が他の女の子より小さくて、無防備な状態で夜の街にいと、いつ
もこうされてきた。そして寄りすぐれば――燦々たる結果が待ち受
けている。服を剥がれ、体を舐め尽くされ、欲望を、あたしの中に
注がれる。娼婦にも劣らないあたしの体は、既に拒否反応を示して
いた。証拠に、寒気と畏怖が入り交じった体は、震えから解放され
ることがない。

気づけば彼は、あたしの隣に腰を下ろして、傘をあたしの上に掲
げてくれた。あたしがそれに気づくと、あたしは彼の骸骨に似た手
を振り払った。傘が薄雪の積もる街道に力なく倒れて、その姿を彼
は呆然とした表情で見つめていた。

「あたしに、構わないで」

自分の声は酷く冷え切り、同時にふるえていた。けれど彼は苦笑
しながら、大して機能しないコートを、あたしの上に掛けた。

「構わないでって、言ってるでしょ！」

あたしはコートを剥ぎ、彼に投げ返す。それでも彼は、色の薄い
指をあたしの肩に当てて、寂しげな声を投げかけた。

「僕が構う」

あたしは目を見開く。

「僕の性格だから、どうにも放っていくわけにはいかないんだよ」
すると彼は、あたしの肩と、冷え切った太ももに手を回して、軽

々とあたしのことを持ち上げた。一見すると非力そうにしか見えな
いのに、あたしを軽々と持ち上げる様には、想像を覆される。

「は、離せ！」

「とりあえず、僕の部屋に行かないと。凍死しちゃうから」

「あたしのことなんか構わない、なんでお前はあたしを構うの！」
「似てるからだよ」

柔和な表情を向けた彼は、あたしが今まで他人から聞いたこと
もない——本当の意味で優しい——声を、振りかける。あたしはそ
の聲に一瞬我を忘れて、彼に抗う術を、忘却してしまいそうになる。
けれど、あたしは耳をふさいで、必死に悶えた。彼の腕を振り払
い、指の爪を立ててあらわになる彼の皮膚をひつかき、靴の踵で彼
の腿を叩き、彼の腕から離れる。そのまま一心不乱に、雪が薄く積
もる道を蹴り出した。ただ、考えもなしに、息を切らしながら、彼
から逃れようと、走り続ける。

走る。

走る。

雪は止む気配もなく、あたしの顔や頭に覆い被さっていく。滑る
道を用心しながら、彼の姿が、闇から消えるまで、あたしはただ、
何も考えずに。

何分も走ったところで、ようやく街の外れに出た。白い息を立て
て身を翻すと、あたしが駆けてきた証が、道の上に残っている。も
う彼はあたしをあきらめたるうか。あたしは苦笑して、やっぱりそ
の程度じゃん、と呟いていると、闇の中に、息を切らす音が聞こえ
てくる。まさか、なんで、と思索を過ぎらせるけれど、その事実
に、目を背けることは出来なかった。

「逃げなくても、いいのに」

息を切らして駆けてきた彼は、優しい微笑みを見せた。何で——
ここまで、執着するの？ あたしなんて、放っておけば良いのに。
あたしの汚れた体を見れば、後悔だってするし、何も得なんて無い。
だから、放っておいて。

そう叫んで見せたけれど、彼は身を下げることなく、叫び尽くして声を枯らしたあたしの頭に積もった雪を払う。

「だから、言ってるだろ」彼の声に、あたしはあごを上げる。

「君は、僕と似てるんだ」

彼は絵描きとして職を求めるため、この街にやって来たという。

その事實は、あたしが彼の部屋に来てから、三日後に教わった。

「僕の故郷は貧しい村でね。絵に自信があったから、最初で最後のチャンスをねらって、この街に来たんだ。まあ、仕事という仕事なんてほとんど無いんだけどね」

彼は苦笑して、感慨深そうに言った。事実、彼の部屋には必要最小限の家財しか設置されていなく、あたしにくれた食事も簡単な物しか無かった。けれど、今のあたしには、それが十分すぎて、初めて彼の部屋で夜を明かしたときには、涙が止まらなかった。

街に今年初めての雪が降った夜は、或る意味あたしのとつても節目の日だったのかもしれない。今まであたしを騙してきた男たちのように、彼はあたしの体を求めることもなく、心から、あたしを不安げなまなざしで見っていたのだ。出会ってから、ずっとだ。その彼の優しさのお陰で、何とか飢え死を逃れているし、外にいるよりはましな暖かさを、彼から提供して貰っている。

「それで、君は何をしているの？」

彼はテーブルに座るあたしの対角に座り、お湯をすすった。あたしは一瞬言葉に詰まって、何を言えば良いか分からなかったけれど、気づけば自然と、かすれ気味の声で言う。

「始末屋、って言うのが一番近いかもしれない」

端的に言えば、それは「殺し屋」と同義なのだ。

依頼された人間から金を直接受け取り、指定された人間の首を切る。そして、その死体を隠蔽する。言葉で説明すれば、それだけの仕事だ。

「じゃあ、つまり『裏の人』ってことなんだ」

あたしは力なく頷く。まるで、取調官に尋問されているようだ。彼はあたしの現実を知って、絶望するだろうか。いや、むしろの方が良いのかもしれない。この仕事柄のおかげで、あたしを知る街の住民はあたしを「悪魔の使者」と呼び、罵倒する。治安部隊が正式に存在しないこの街では、逮捕されることはないのだけれど、いつしか住民に殺されることだって、あり得る。石を投げつけられ、怨念と恨みの山積された剣で、あたしを見る者も見られぬ姿に変えるかもしれないのだ。

「それに手を染めたきつかけとかは、あるの？」

「……生きていくため」

それしか真実でないのだ。

「じゃあ、今は？」

あたしは何も答えなかった。どこかで、彼を落胆させてしまいそうで、その顔を見るのが嫌だったから、というのが本音だった。人を殺めてきた人間を前にすれば、どう反応するかくらい、察しはつく。だからこそ、あたしの口から続きのテロップは流れてこなかった。

彼は一瞬だけ表情を失ったけれど、唐突に立ち上がって、テーブルの裏に設置された、イーゼルの前に腰を下ろした。

「なら」

彼は筆を握って、またあの、優しい笑顔を向けてくれる。

「僕のモデルになってよ」

「え」

「僕が君の絵を描こう。そして、それを売れば、生活はましになるだろうし、君がこうして僕の家にいる意味にもなる。それは僕にとっても大切なことだし、君にも不利益はない」

あたしが彼の言葉の意味を理解できずにいると、彼はあたしの返答を待たずに、ボロボロの鉛筆を拾って、スケッチブックの上をなぞっていった。あたしの狼狽の声に耳を傾けることもなく、指先を鉛筆に集中させる彼の姿は、柔和な表情からは思いも付かない姿だ

った。あたしは彼に声をかけることが出来なくなり、しばらく物思いに耽っていると、彼がスケッチブックを破って、嬉しそうな表情でその絵を見せてくれる。

その絵は、あたしの横顔を示したものだ。鉛筆一つで、陰影や髪の毛先まで、実に細かく書かれていて、写真を見ているかのようだった。その絵を見ていると、胸の奥に詰まった重いものがじわじわと和らいできた。そして彼はその絵をあたしに渡してくれる。

「それは、君とのともだちの証だよ」

「とも、だち？」

かすれ気味の声が漏れる。

「そうだ、僕らは友達だよ」

その言葉に、あたしの中に積み重なったものが、雪崩のように崩れ落ちてきた。あたしは気づけば、大粒の涙を画用紙の上に垂らして、その画用紙を強く握りしめてしまふ。

ああ、これが優しさだ。

そう気づいたときには、あたしは深い嗚咽を漏らして、その場にしゃがみ込んでいた。溢れてくるものが止まらずに、声を振り絞った。彼はあたしの酷く薄い背中を叩いて、さすってくれた。やがてあたしに小さく、名前を問うてきて、くしゃくしゃになった画用紙にあたしは薄く鉛筆をなぞる。

『黒猫』

詳しくは、あたしも分からない。

それを与えられたのは、あのおぞましい社会に入ってからだから、本名なんてとうの昔に忘れてしまった。そう声を絞り出すと、彼はその文字の上に二重線を引いて、新しく名前を書き出す。

『黒き幸』

「僕は君を見たとき、『黒』の印象が合ったんだよ。そして今は、モデルとして、僕に幸を分けてくれる。だから、君の名前はそう呼ぼう。『ホーリーナイト』と」

それから、その画用紙の上には、あたしの涙が絶え間なく流れてきた。

彼は毎日、絶え間なくあたしの絵を描き続けた。飽きることもなく、角度を変えて、あたしの顔を。細部にいたるまで書き込むにつれ、絵は精密化を増していき、展覧会を開いても申し分ないくらいの数になっていた。朽ち果てているうえ、虫食いの穴が多くみられる床は、すでにあたしの絵で埋まっていた。時々彼は、見たことのない変な表情や、道化師のようなポーズを取ってあたしを笑わせると、その表情にすかさず焦点を当てて、絵を描いていた。毎日そうやって彼の前に座っているだけだったのだけれど、今までにない人生の楽しさを実感できていて、気づけば心の中に沈んでいた過去も、少しずつ希釈されていったような気がした。

「今度、この絵を町に持って売ってくるよ」

その晩に、彼は唐突にそう言った。居候の身のあたしが言えた言葉ではないのだけれど、彼の生活は日に日に困窮を増していたのだ。今までは日雇いの仕事で何とか食い扶ちをつないできたけど、冬になった途端に日雇いの仕事は彼のもとを離れ、一日一日食べていくにも精一杯だった。あたしも、本音を言えば、あの血生臭い世界に戻って、仕事をすれば、彼を楽にできたかもしれない。けれど、善心にあふれる彼は、あたしのことを気遣ってかあまりあたしを外に出そうとはせず、代わりに家事をあたしに任せようになった。居場所を与えられるだけで十分だったあたしは、彼に甘えて、彼との生活に順応していった。

「でも、売れるの？」

月明かりが薄い毛布の下で包まるあたしたちを照らしている。彼は苦笑して、あたしの両手を握ってくれた。

「大丈夫。僕が描いた作品だから」

「ずいぶん自信ね」

あたしも苦笑して、彼の掌に吐息を吹きかける。毛布を取れば、外にいるかのように寒い室内だったのだけど、彼とこうしている間は、温度感覚を失ってしまうのか寒さすら感じなくなっていた。あたしがこうして「二度目の冬」を過ごすことになってから、彼は毎日こうしてあたしの手から、全身を温めてくれた。

心からの温もり。

毎日毎日、こうして彼といることが、新しい発見につながっていて、あたしには日に日に新しい感情が芽生え始めていた。毛布の中。彼と食事を探っている間。モデルとして、彼の前にいる間。ここまですぐ救いようもない人生を生きてきたあたしにも、こんな人間味があったんだな——と感じさせるような日々。

「でも、君なら大丈夫だよ」

あたしは彼の掌から手を抜き出して、彼の額を撫でる。

「あたしの友達だもん」

「君も随分な自信じゃない？」

あたしたちはそれから笑い合って、互いの視線を合わせながら眠りに入っていた。体を重ねることは無かった。あたしは心の中で、彼とはずっと「友達」でいたかったし、これ以上の関係なんて望んではいなかった。今の生活で十分心が満たされているから、これ以上に望むものなどほとんど無かったのも、理由の一つかもしれない。静かな吐息を立てる彼の鼻筋に指をあてると、あたしは毛布から顔を出して、窓の先に映える月明かりを覗いた。夜に見ると不幸になるといわれる黒猫と揶揄された時に見た月とは、また違った印象を覚えた月だった。青白い光のシャワーを浴びているにつれて、本当にあたしが誰かに寄りすがって、孤独から逃げ出したことが信じられなくなってくる。あたしは自分自身を自嘲気味に嗤い、そのまま床に就いた。

でも、そんな日々ばかりが長く続いたわけではない。

彼が絵をあたしの絵を描き始めてから二か月が過ぎたころだった。日が沈んだ頃、街から帰宅し、いつものようにあたしはイーゼルの前で鉛筆を走らせる彼に帰宅を知らせた。いつもならば、淡白で優しい物腰の笑顔をあたしに返すはずだったのだけれど、彼は背中を向けたまま、あたしの声に何の反応も見せなかった。あたしは彼の名を呼ぶ。返事はない。そして、彼の肩をいたずら半分で摩った。「うっ」

小さくつぶやいた言葉が、終わりの始まりだと、直感が告げた。彼はイーゼルの前で、力なくあたしの絵の山の上に倒れこんだ。一瞬何が起こっているのか理解できなくて、あたしは無我夢中に彼の名前を呼び、叫んだ。けれど返答はなく、代わりにあたしのもとに返ってくるのは、彼の過呼吸と、無理にでもあたしを楽にさせようとしている、あの微笑みだけ。馬鹿。馬鹿。そう叫んだけれど、彼は険しい表情を見せることもなく、弱弱しく部屋の隅の戸棚を指さした。

「手……がみ……」

「手紙？」

ためらいがちの声をあたしは上げる。

「僕の……故郷で待つてる……あの人に……」

それだけ言うと、最後にまた目を細めて、そのまま——力なく、あたしの掌から、崩れ落ちる。

あたしの中に、深い慟哭が流れ込んだ。彼のこけた頬や、肉付きのない腕や指先を見ればわかることだった。貧困の中で、彼はただあたしの絵ばかりを描き続け、最後の最後まであたしに苦しい表情を見せることもなく、優しいままだった。その彼の表情を脳裏にのみがえらせていると、全身からやるせなさや、絶望感が溢れてきて、あたしは彼の顔に涙を垂らしていた。

部屋に散乱するあたしの絵を無我夢中になって破き、気づいた頃には部屋中が粉雪のような紙くずに埋もれていた。深夜を迎えた視

界は、涙で歪んでまともな世界が見えない。居場所や、存在意義や、名前を彼は与えてくれたのに、あたしは何もできなかった。結局は、彼に寄りすぎり、甘えるだけで、彼に何も与えてやれなかった。

あたしは彼が指さしていた、戸棚の方へ眼を向ける。その小さな戸棚は、あたしがこの部屋に居座るようになってから、開けたことは無い。中に何が入っているのか彼に尋ねたことはあつたけれど、そこには故郷の思い出があるから、と彼は曖昧に言つたままだった。枷をはめられたような重みを感じる足で立ち上がる。鍵を切られた猫のように、戸棚の前に身を寄せると、あたしは軋んだ戸棚を引いて、その中のものを見て、更に愕然とする。

あたしの絵だった。小さな引き出しの中には、彼が自信を持つて街に売り出しに行つていたあたしの絵が、丁寧に折られて収納されていた。多分、五十枚近くはある。なけなしの財産で買った紙に、彼はあたしを綴りつづけた。理由は分からなかった。だって、悪魔と罵倒されたあたしの絵を買うような物好きは、この街には存在しない。本当は、最初からわかりきつていたのだ。あたしは不吉な黒猫だ。月の夜に現れて、不幸をもたらす存在。そんな存在を、買う人間なんていやしない。

でも、あたしはその言葉を彼に向けることができなかった。もしかしたら、彼はその事実に基づいていたのかもしれない。なのに、彼はあたしの絵だけを描き、こうして冷たくなってしまった。

なら、あたしには何ができる？ 結局は彼の疫病神となって、漫然と過ごしていただけた。そんなあたしにできることなんて、あるの？

自問を繰り返しながら、絵の山を掘り進んでいくと、やがて一枚の茶封筒が出てきた。差出人の名前は、見慣れた彼の文字で「アン」とだけ。封を閉じられたその手紙が、彼の故郷で待つ女性^{ひと}への手紙だということは、すぐに察しがついた。

あたしはその手紙を握つて、彼へと視線を向ける。やがて、口から自然に、言葉が漏れてくる。

君は、なんであたしの絵だけを描いたの？

結局、あたしにはわからないよ。

でも、あたしのせいで君はそんな姿になってしまったんだね。
なら、あたしにできることはあるのかな。

あたしは——何のために、君のそばにいたのかな。

下唇を強く噛んで、首を左右に振った。自問する必要なって無かった。この手紙を待っている人がいる。だったら、彼から向けられた問いに、答えは一つしかない。

手紙は確かに受け取ったよ。今から、届けに行くから。

街はすでに夜を迎えていた。一週間ぶりの雪が、容赦なくあたしに打ちかかってくる。手紙を握った手で自分の頬を殴り、あたしはレンガの道を駆けだした。無我夢中になって、あの日、彼に追われた時のように。でも今度は、過去の生き方から逃げるために、走るんじゃない。ただ、あたしがこうして彼のそばにいる証を、見つけるために。

灰色に聳える街を抜けて、雪の積もる畑の間の小道を駆けていく。寒風が包む夜に、月明かりは無かった。凍てつく土を蹴り、過去の罪で穢れた腕をいっぱいに振って、あたしは依然彼に教わった、彼の故郷への方角へと走る。闇の中を手さぐりに進んで、時折あたしに吼える、番犬におびえず、うろたえることもなく。痛みも忘れて、今は彼の願いを、叶えに。

雪の降る山道は、いつにもまして傾斜が厳しく感じられた。行商人が切り開いたという山道は、雪の影響と視界の悪さが相まって、酷く進み辛い。本来なら、今すぐ家にこもっているほどだ。顔に張り付く雪のおかげで焼けるような錯覚を覚え、瞳をまともに開けることができない。あたしはかつて彼が握っていた手を強く握りしめて、足を一步步づつ、踏み入れる。山林はいつしか雪にすっかり隠れ、山の姿は人一倍大きく映えた。それでも、重い足と決意を胸に閉じ込めたあたしの体は、立ち止まることがない。自分でも不思議だっ

た。本来なら、こんなつらいことはあきらめて、自分が生きられる場所を求めているはずなのに。すでに足に貯まる乳酸は限界値を越えていて、ふくらはぎの痛みも尋常ではなかった。

でも、あたしは止まらない。

親友と、約束したからだ。最初で最後の友との約束を、あたしは無下にはしたくない。

だから、あたしは走る。この体が悲鳴を上げて、粉々に砕けても、あたしは彼の願いを叶えたいから。なら、この体がどうなろうと、あたしの知ったことではない。

山の頂上へよじ登ると、空は群青色を見せ始め、雪も徐々に弱まってきた。この山を下れば、彼の故郷はもう近い。一息つくと、深呼吸をして、あたしは前へと踏み出す。

長い坂だった。片手に握られた手紙は、すでに皺くちやだった。膝の関節はがくがくで、窪んだ道だったら間違いなく転んでいる。そうすれば、道から転がり落ちて、骨折だってあり得るかもしれない。でも、今のあたしに怖いものはない。

今までなら、何のために生きてきたのか、と問われたら返答することとはできなかった。でも今は、この手紙を、彼の帰りと待つ人のために生きていると、胸を張って答えられる。だから今は、どこまででも、走っていける気がする。

山林を滑り落ちるようにつけたところには、群青が更に明るさを増し、遠くの峰から朝日が姿を見せてきた。ほぼ同時にあたしは麓の田舎町に足を踏み入れ、鶏の鳴く声を耳にした。砂利の道をかけていると、目覚めを迎えた村の住民が家から少しずつ出てきて、あたしの姿を見て目を白黒させている。みすばらしく、顔が傷だらけで指名手配すらされた経験を持つあたしの顔に見覚えがあるのだろう、彼らの瞳は恐怖におびえていた。

「おい、見る！」

甲高い声が、朝日に抱かれている村にこだまする。

「悪魔の使者だ！ 不幸をばらまく黒猫だ！」

子供の声だろうか、その声を封切に、かつてあたしが味わった過去と同じように、石の雨が空に飛び交った。不揃いの大きさの石があたしの背中や腕、頭にぶつかって、疲労も相まり倒れそうになるけれど、手紙だけは何とか胸の中に包んで、あたしは走ることをやめようとはしない。

なんとも呼ぶがいい。

今のあたしは、人を殺めるための存在じゃない。

あたしは誓ったんだ。彼の願いを叶えるために走り続けると。今まで持っていなかった、消えない名前を初めてあたしに与えてくれた、彼のために走り続けると。

本当は最初、「ホーリーナイト」の意味が分からずに、彼に問いかけたことがあった。不勉強なあたしには、その意味がちっとも理解できなかったけれど、自分に与えられた名前の意味くらいは知っておきたかった。

「君に出会ったときは、僕がこの街に来てちょうど二年が過ぎた記念日だったんだよ」

その日は、街に大きなクリスマスツリーが飾られた日でね、と彼は懐かしそうな表情を浮かべて、感慨深そうに言った。それでも理由の分からないあたしは、再三再四彼に問う。

「つまりね」

彼は人差し指を立てて、学者気取りの口調になる。

「ホーリーは『聖なる』って意味だ。ナイトは、『夜』の意味。だから、つなげると『聖なる夜』って意味なんだよ。つまり、君の名前は僕が初めてこの街と出会った聖なる夜で、同時に君とも出会えた聖なる夜。だから、君にはこの名前がうってつけだと思ったんだよ」

ずいぶんすごい名前にしたんだね、とあたしは苦笑して、その日もモデルとして彼の前に座っていた。あたしをそう呼んでくれた人を思い出すと、何気ない会話一つ一つが、あたしに涙を誘ってきて、

切れていく風の中にその感情は溶けて行つた。だって今、こうして彼の願いを叶えに走っているのに、泣いているあたしを見れば、彼はきつと悲しむ。だったらそんな感情はいらない。今は、彼の未練を埋めに、生きるだけだ。

彼の故郷にたどり着いた頃には、もう二度目の夜を迎えていた。関節はがくがくで、体中が痛い。本音を言えば、走るといふよりはもう死に物狂いで歩いてきたという方が正しい。家を出るときに、「彼女」の家への地図を棚から取り出してきたから、道には迷わないのだけど、その前にあたしの命が持つかどうかの方がきわどかつた。ここまで来るのに、過去に負ってきた古傷が開き、雪をまともに浴びた体は温度差で熱っぽくなっているのだ。今すぐ倒れる、と言われたら倒れてしまいそうな勢いだった。

靴底で故郷の感触を踏みしめながら、家の表札の名前を確認していく。一字一字を辿っていくたびに、視界がかすれ、自分でもさすがにまずいと気づき始めた。

道に転がっていた、小石に躓く。頭からまともに道に倒れこみ、鼻が潰れたかのような痛みが迸る。ひじを曲げて、限界に近い体を持ち上げる。けれど腕に力が入らず、そのまま道にもたれ込む。

ああ、あたしはここで終わるのかな。でも、不思議と悪い気はしない。初めて誰かのためにここまでやれたんだ、満身創痍だ。

でも、ここで終われば、あたしはまた後悔するのかな。だって、手紙は「彼女」に届いてはいない。それは、彼の願いを叶えたことには、なりはしない。

肉が剥がれ落ちたような腕で、身を起こす。泥と血にまみれた指で道を握りしめて、少しずつ立ち上がると、かすれ気味の息を吐いて、少しずつ、また闇の中を探し回る。砂利が弾ける音の中を歩きながら、十分が過ぎ、二十分が過ぎやがて――

あたしは、彼女の名前の家にたどり着いた。でも、表札が見えただけで、彼女の家の全容は事細かには確認できない。門をくぐって、

これを彼女に届けなくちゃ――

でも、そこであたしの意識は途絶えた。門の前に座り込んだあたしの体は、自分の意志では何とかならないほどまでにぼろぼろだった。

ごめん、あたしは果たせなかったよ。でも、これでいいのかな。君は、喜んでいてくれるかな。あたしは今、生きてきた意味を胸に、眠るよ。

そして意識は深い深い海に沈むように、恐ろしく静かに、溶けていく。あたしのことを置いて、どこか遠くへと。

*

唯一の友のために、手紙を届けた彼女の名前を知る人間は、結果的に誰一人として存在することも無くなった。剥製のような姿で門の前に座り、息絶えていた彼女を最初に発見した『彼女』は、亡骸が大事そうに胸に抱いていた茶封筒を取り出し、裏の端に書かれていた『彼女』の名前を見て、その場に座り込んでしまったという。

かつて彼女が愛した人の筆記で書かれた手紙を読むと、彼女が彼が上京してからの最初の友達となったこと、彼女が彼のモデルとなってくれたことなど、大切な友であった彼女のことが事細かに記されていた。そして、もちろん愛する『彼女』への想いを綴った文面に、『彼女』は一人泣き崩れていたそうだ。

翼の折れた天使のような微笑みを見せていたその亡骸は、いつしか『彼女』によって、ひそかに小さな墓標とともに街の隅に埋葬された。彼女を「聖なる夜」と呼んだ彼になぞって、名もなき亡骸の名を、『彼女』はこう掘ったという。

「K」。

最後の最後まで、友のために命の灯を削り、燃やし尽くした騎士の名前を称えて――。

（後書き）

拙い作品でしたが、目を通し頂きありがとうございました。

投稿時間とかいろいろ急いでいたので、ずいぶんとまあ支離滅裂な文章になってしまったと思います。

僕が思い描く「K」の印象は、全部出し切りました。一般的な見方とはまた異なる作品になってしまったので、上手に書けたかどうかはわかりませんが、楽しんでいただけたのであれば何よりです。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3947t/>

snow Knight

2011年5月20日23時25分発行